

第一回「絹織物上」

埼玉産業歴史探訪

ぶぎん地域経済研究所 調査事業部 主任研究員 佐久間 康弘

今回から、新しい連載企画として、「埼玉産業歴史探訪」をスタートします。まず、第1回は「絹織物」を、2回シリーズで取り上げます。

初回は、地場産業としての埼玉の養蚕・製糸業と秩父織物の起源・発展について、次回は、県の伝統的手工芸品に指定されている「秩父銘仙」、「本庄織物（本庄緋）」、「飯能大島紬」の歴史や特徴などを取り上げてみたいと思います。

地場産業としての養蚕・製糸業

■江戸期以前

埼玉県は古くから行われ、遠く高麗人の移住により養蚕機織りが始まったとも伝えられています。

文献によりますと、元正天皇の霊龜2年(716)に駿河、甲斐、相模、上総、下総、常陸、下野7国の高麗人1,799人を武蔵国に移し、高麗郡が形成されました。この高麗人がこの地において生活用品を生産することを通じて、養蚕機織りが移入されたといわれています。生産技術の面では、大和朝廷は全国統一後、積極的に産業奨励策を推進してきましたが、その最も手っ取り早い方法は、多様な生活関連技術を有している大陸からの帰化

人を地方に移住させることでした。

埼玉県は豊かな自然に恵まれ、丘陵地域からは、絹織物の原材料である桑、蚕が多く産出され、江戸時代中期以降は、かなりの養蚕が発達したようであり、後述する秩父絹市などのように盛大な取引が形成されていきました。

江戸期においては、江戸幕府が成立し近接地に大消費市場が形成されたことが、当地の地場産業にとって大きな変化をもたらしました。

絹織物業についてみますと、元禄期以降、武士階級と富を蓄積しつつあった上層商人階級の和装織物として需要が着実に拡大していきました。また、江戸市場における問屋と産地における仲買人の関係も形成されていきました。

埼玉において江戸時代に絹織物が発展した理由について需要側の要因からみますと、①武士階級と商人を中心とした非生産階級の多

表1：埼玉県の養蚕の歴史（明治期まで）

時代	主なできごと
弥生 紀元前後	大陸から養蚕機織の技術が日本に伝来
崇神天皇の御代	知々夫彦命が国造として秩父に来任、養蚕と機織りを教示
奈良 8世紀頃	武蔵の国では租庸調のうち、調を絹で納める
室町（南北朝）貞治年間	高麗郡内で帖絹（つむぎ）が広く生産される
江戸初期（慶長）17世紀	武士や町人たちの衣料として、絹織物の需要が増大
江戸中期（元禄）同末期 （享保）18世紀 （天明）同末期	秩父・小川・飯能・越生・川越等の絹市が活発化 秩父絹が大阪で高く評価される 本県下の絹取引が二十二万五千三百疋に及ぶ
江戸後期（天保）19世紀 （天保）1852頃 （安政）1857 （文久）1861頃 （文久）1862 （慶応）1866	このころの本県養糸業は、秩父郡・入間郡・高麗郡が中心 フランス・イタリアの養蚕業が、蚕の病気の流行で壊滅的打撃 渋沢宗助（深谷市）が「養蚕手引抄」を刊行 横浜開港、生糸貿易が盛んになる 地元絹織物業者と生糸輸出業者の競争激化 製糸業の勃興と繭糸業者（繭仲買人）の発生 幕末から明治にかけて、全国的に養蚕業が急速に拡大
明治（6年）1873 （14年）1881	官営富岡製糸工場の開設 狭山市に県内初の機械製糸「暢業社」が起業 県が養蚕組合概則を布達、養蚕業の振興を図る
明治中期 1890頃	このころ県内には22か所の繭市場が存在
日清戦争前後	片倉など信州系資本の県内各地への進出が活発化
明治末期 1905頃	機械製糸が座繰りの生産高を追い越す

出所：埼玉県農林部生産振興課「埼玉県の養蚕・絹文化の継承について」

表2：本県養蚕業の推移

年次	桑園面積（町）	養蚕戸数（戸）	収繭量（石）
明治20年	15,194	60,119	85,963
30年	20,056	85,236	158,853
40年	25,910	98,078	253,473
大正5年	25,588	102,533	328,591
昭和元年	29,415	110,841	4,526,216
10年	33,306	97,611	4,852,446
15年	32,973	90,420	6,232,018

出所：埼玉県製糸業史

くの人口を有していた江戸に近接し、織物など日用必需品を供給する産地として位置づけられていたこと、②江戸と各藩を結ぶいわゆる五街道のうち中山道、日光街道が当地を通過しており、街道の宿場町として栄え、そこに投宿する人々に消費財を供給する役割が与えられたこと、などがあげられます。（表1）

■明治・大正期

幕末から明治にかけて、ヨーロッパ諸国、とりわけイタリア・フランスなどの生糸生産国では、蚕の病気が大流行し、生産に大打撃を与えました。その生糸不足を解消する一手段として日本の蚕糸類（生糸と蚕種）を求め、そのため日本の生糸輸出は増大し、輸出品の第1位を占めるようになりました。「殖産興業、富国強兵」を掲げていた明治政府は、生糸輸出による外貨と欧米諸国の最新技術を獲得しようとした。

当地でも、明治政府の殖産振興政策の下で産業振興が進められ、開港以後、輸出産業の中心であった製糸業は、明治初期に本県が農林統計で全国五指に入る養蚕県となりました。（表2）

明治9年（1876）に高麗郡上広瀬村（現狭山市）に60人繰りの機械製糸工場「暢業社」（ちょうぎょうしゃ）が、北埼玉郡成田町（現行田市）には埼玉製糸会社が設置され、明治10年代には、県北西部地域に機械および座繰り製糸工場が二十数か所設置され、広域的に地場製糸業が形成されていきました。

埼玉県では、座繰り製糸と比べて機械製糸の普及は遅れましたが、明治30年代に入り、製糸業が栄えていった長野県から製糸業者が

表3：明治期の主な製糸工場

名称	設立	所在地	釜数	備考
片倉大宮製糸所	明治34年	大宮町	120	信州資本
大宮館製糸所	明治37年	大宮町	486	信州資本
大宮山丸製糸所	明治40年	大宮町	227	信州資本
渡辺組大宮製糸所	明治44年	与野町	260	信州資本
旭館製糸場	明治36年	与野町	80	地場資本

出所：さいたま市立博物館「さいたまの製糸」

進出してくるようになると、その様相は一変しました。豊富な原料繭と広大な土地が確保でき、必要な労働力と輸出生糸を輸送できる鉄道の沿線であったさいたま市域は、機械製糸業が発展する要素を兼ね備えていました。(表3)

秩父織物の起源と発展

秩父織物の起源は古く、崇神天皇すじんの時代に知々夫彦命ちちぶひこのみことが秩父の住人はたおりに養蚕と機織の技術を教えたことに始まると伝えられています。秩父は山に囲まれた盆地であり、石灰質の強い土壌は稲作に向かず、山村農業として、養蚕、絹糸で生計を立てていました。

小田原北条時代には、浅見伊賀守が根古屋城（現秩父郡横瀬町）の陣代となり、製絹を奨励したということも伝えられています。

秩父織物が特に飛躍発展したのは、「地理的特質」、「山村農業としての特質」、「忍藩^{*1}の産業保護政策」の3つが大きな要因であったといわれています。

地理的特質とは、農家生産による生糸を原料として自家で行う居座機式手工業生産で、桑木栽培が当地に多く存在し、当地の農家と結びつき普及していったこと、山村農業の特質とは、米作耕地が少ないため、養蚕・製糸・絹織りは、現金収入の確保につながり、農家全体に利益をもたらすものであったこと、忍藩の保護政策とは、養蚕業の保護のために絹市税がなかったこと、などによるといわれて

います。

■絹市

秩父産地における絹市の起源は定かではありませんが、元禄年間にはすでに秩父絹は江戸問屋に販売されていたとの記録が残っていることから、当時に絹市は成立していたと考えられています。

絹市の取引は、一定の店舗で取引されたものではなく、街道傍らの一定の場所に買人が座を占め生産者と売り買いしたものであります。文政から天保年間（1818～43年）には、すでに専門の機元も生まれ、機元→商人→絹仲間という専門的な流通組織が形成されるようになり、これが明治・大正年代の流通取引の母体となっていきました。

文献によれば、天明初期（1781年頃）に、武州一円で作られた絹の生産量をみてみると、武蔵国二十五か所の絹市で年間取引されたのは、31万6600ひき疋とされ、このうち、秩父郡内の四絹市（大宮郷、小鹿野、吉田、野上）の出来高が、5万3000疋とされ、実に17%を占めていました。

また、この当時の大宮郷での取引量は3万1000疋、金高で1万5,500両、石高に換算した取引量では、1万8,562石に上り、当地の村石高（8,900余石）を約1万石も上回っていたとされています。

■明治中期から昭和初期 ～秩父銘仙の誕生～

幕末になって外国貿易が開始され輸出生糸が急増するようになると、当産地の生産組織は大きな転換を迫られるようになりました。すなわち、生糸が輸出商品となると当産地でも製糸業を独立させるようになり、産地構造が大きく転換するようになっていきました。

明治政府は、養蚕業の輸出向け製糸業を展開するため、群馬県に官営の富岡製糸工場を開設しました。これにより原材料の蚕糸が埼

*1 忍藩:江戸期に現在の行田市を本拠とした譜代藩（石高10万石）

玉県を始め近隣の県から購入され、当産地の産地構造の転換と活性化に結び付いていきました。

一方、内地向け絹織物業の伝統を維持しようとする動きもみられました。輸出向け製糸業の発展と製糸価格の急騰の中で困難な状況ありましたが、玉繭糸が輸出向け生糸に適していないことが幸いし、秩父織物は、輸出不適格の太糸を利用して秩父太織への転換を図るとともに、化学染料を取り入れ、染織縞物への転換を図りました。

また、秩父製糸業の近代化の観点からみると、その手始めとなるのが、明治10年(1878)の水車を動力とする機械製糸薄製糸社の設立です。明治28年には「埼玉県秩父織物組合」が設立され、染色検査による製品の品質管理を重視し、新技術の導入にも取り組んでいきました。

化学染料を用いた染色技術の開発では、秩父出身の坂本宗太郎氏によって明治41年に、“ほぐし捺染”の技法が開発され、これが秩父銘仙に応用されました。“ほぐし捺染”技術の開発により秩父銘仙は大胆で華やかなデザインの織物となり、女性の間で手軽なお洒落着として、大正から昭和初期にかけて全国的な人気を得るようになりました。

(以下、次号へ続く)

今回は、埼玉県の伝統的手工芸品に指定されている「秩父銘仙」、「本庄織物(本庄緋)」、「飯能大島紬」の歴史や特徴を中心に取りあげる予定です。

富岡製糸場と埼玉県内の動向



蚕糸類の価格が上昇し生産量が増大する一方で、生糸の粗製濫造をもたらした。洋式機械製糸による生糸の生産拡大と品質向上のため、明治5年(1872)群馬県に日本初の官営富岡製糸場が設立された。全国各地から工女たちが入場し、新しい製糸技術を習得し、故郷へ戻って指導的な役割を果たした。

初代場長には、渋沢栄一の義兄である尾高惇忠(深谷市出身)が就任したが、「外国人技師に生き血を取られる」という流言が広まり、当初、工女の応募は皆無であった。

特に埼玉県が他県と比べて伝習工女の入場が少なかったため、埼玉県参事(県の次官)白根多助は、管内の各区に対し、工女の修業有志を申し出るよう布達している。

片倉製糸

片倉製糸は、明治6年(1873)長野県諏訪郡(現・岡谷市)で家族経営の座繰り製糸から操業を開始した。製糸業の拡大に伴い「片倉組」を組織・開業し、明治34年には片倉組繭所として大宮町仲町(現・大宮区)に移転。さらに大正5年(1916)に吉敷町(現・大宮区)へ78000坪の広大な敷地と360釜の規模を持って新築移転した。

大正9年に片倉製糸紡績株式会社に社名を変更し、昭和12年時点では、1府24県に58か所、朝鮮に4工場が操業する大資本の製糸会社となった。大宮製糸所は設備の完備や庭園の美観により、数ある片倉の製糸所の中でも代表的な工場であった。

出所：さいたま市立博物館「さいたまの製糸」